わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ ―― 125

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

歌舞伎にみる母親像

江戸時代初頭に、伊達氏の仙台藩で起こったお家騒動は「伊達騒動」と呼ばれている。

簡単にいえば伊達家という名門一族の間で繰り広げられた内紛であるが、のちに歌舞伎や人形浄瑠璃で上演されるようになり、様々な脚色に彩られ今日まで受け継がれてきた。

実話を基にしたこの物語の中で、もっとも有名なシーンは「飯炊（またたき）の場」の一幕である。

登場人物は、伊達家の幼君である「鶴千代」とその乳母「政岡」、そして政岡の実子「千松」の三人で始まる。政岡は、鶴千代を家中の逆臣どもから守るため、食事も自分で作ったものしか口に入れさせない。いつ誰がどんな風にして鶴千代の命を奪うかもしれぬ、そんな緊張の中で日々を生きているのである。

ある日、鶴千代を狙って繰り広げられる陰謀渦巻くなか、なんやかんやでろくにご飯が食べられず、お腹を空かせた鶴千代のために政岡は茶道具を使って飯を炊き始める。もちろん、同年代の千松も空腹なのは同じこと。しかし、鶴千代に仕える身として、

「さむらいの子というものは、腹が減ってもひもじゅうない！」とやせ我慢のせりふを吐き、聴衆の笑いと涙を誘う。

ようやく炊き上がった飯を食べようとしたその時、逆臣のひとりである老中の奥方、栄御前がやって来て鶴千代の病気見舞いと称して和菓子を持ってくる。もとより空腹に耐えかねていた鶴千代が和菓子を食べようとしたそのとき、千松が走り寄って和菓子を奪い口に入れてしまう。毒入りの和菓子に悶絶する千松を、栄御前のお付の八汐が悪事の露呈を恐れ、すかさず剣を突き刺しなぶり殺しにする。ところが、千松の母である政岡は鶴千代を小脇にかかえて涙の一滴も見せず毅然とたたずんでいる。それを見た栄御前と八汐は、鶴千代と千松をあらかじめ取り替えていたのだろうと思い込んで油断するのである。

さて、ここからが見どころ。ふたりが去って残された政岡は、愛しいわが子である千松の死骸に取りすがり、身も世もあらず泣き崩れ、日ごろから教えていた毒見の役を見事に果たしたわが子を思い、いつまでも号泣するのだ。冷徹に事の次第を見つめていた政岡が、別人のように母親の顔となるこの場面は、見せ所のひとつでもある。

政岡は女形の最大の難役といわれ、これまで錚々たる役者が演じてきたが、私は市川海老蔵でこれを観た。海老蔵は華のある美しい役者だが、舞台では声が少々こもる傾向があり、せりふが聞きづらいところが難点だと思っていた。しかし、政岡を演じた海老蔵はひたすら素晴らしく、心奪われた。

昨今、母親の、子に対する愛情が揺らいでみえる事件が多発している。その最たるものは虐待だろう。虐待を加えるのは圧倒的に実母が多いと知り愕然とさせられた。

本来、我が身から生まれた子が可愛くないわけはない。しかし、環境や社会や様々な人間関係の中で母としての本能が置き捨てられ、子どもとの接触をむつかしくしてしまうのかもしれない。政岡の涙は、人間として当たり前の姿を思い出させてくれる。機会があったら是非触れてみて欲しい。

イラスト・伊藤栄章